

明治期露西亜文学翻訳攷 (二) 『クサカ』

加藤 百合

をひいてからは専心文学に従事した。

レオニード・アンドレーエフは一八七一年ロシア南奥の町オリョールに生まれた。翻訳者の一人昇曙夢の紹介によれば左のように、その作家としての出発は決して恵まれたものとはいえない。

まだ中学に居た頃父を失つて、早くから生活の辛慘を嘗めた。ペテルブルク大学に居た頃は学資が足りなくて二日間も絶食したことがある。自殺を企てたことが前後三回。…一八九七年モスクワ大学の法科を卒へて弁護士となつたが薩張依頼人が無くて、止むを得ず法廷記事を『クリエール』と云ふ新聞へ寄稿して生活して居た。一八九八年同紙の復活祭号にのせた『大きな兜』がゴリキイの注意

しかし、一九〇〇年代に入ると、彼は一種の時代の寵児となった。彼の作品はロシアン・シンボリズム(露国象徴派)の代表とみなされて大流行し、殆ど同時に各国語に訳され、世界中で読まれたのである。

日本でも、明治三十九年上田敏によって「旅行」が邦訳されたのを皮切に、明治四〇年に一作、四一年に二作(二葉亭四迷の翻訳「血笑記」を含む)、四二年に九作、四三年に十一作、四四年に八作、と、一人の作家の作品紹介としては驚くべき早いペースでアンドレーエフの作品は雑誌に現れていった。

三九 「旅行」 仏 上田敏 『芸苑』
四〇・五 「これはもと」 仏 上田敏 『趣味』

四一・一 「血笑記」 露 二葉亭四迷 「趣味」 「マルセイズ」 「世界文芸」

一二 「諺」 英 佐藤迷羊 「太陽」 「犬」 森鷗外

四二・一 「外国人」 英 中村屋湖 「早稲田文学」 「脚本 家の内」 一宮栄 「スバル」

「クサカ」 仏 上田敏 「新小説」 「脚本 黒き仮面」 米川正夫

五 「恐怖」 仏 上田敏 「中央公論」 「大兎」 広島欽一

六 「心」 仏 上田敏 春陽堂 「河」 中村白葉

一〇 「深淵」 露 昇曙夢 「新小説」 「書物」 大森大次

「汽車を待つ間」 中村屋湖 読売新聞 「四 「七刑囚」 英 相馬御風 「早稲田文学」

一一 「信仰」 中村屋湖 梁江堂 「文章世界」 五 「どうして毒菌が生えたかという蛇の話」 「露西亜文学」

「二等大尉カブルウコフ」 「文章世界」 二六新報 九 「悪魔物語」 英 平木白星 「日本雑誌」

「マルセイユの歌」 高貞 「心の旅」 「都会」 英 竹友藻風 「芸文」

四三・一 「戯曲 人の一生」 独 森鷗外 「歌舞伎」 「沈黙」 増田初子 「趣味」 「青鞥」

二 「ラザルス」 英 河野桐谷 「文芸俱樂部」 「二・三 「石垣」 大杉栄 「三田文学」

三 「警鐘」 山本迷羊 「帝国文学」 「趣味」 「趣味」

四 「菌痛」 森鷗外 「趣味」 「読売新聞」

「石垣」 森脇毅 「趣味」 「帝国文学」

「刑場到着」 英 草野柴二 「趣味」

五 「霧」 昇曙夢 「帝国文学」

六 「マルセイユ」 車田 「淡水」

「警鐘」 「淡水」

翻訳は原語からに限らず、各目の知っている語字を用い、仏訳、独訳、英訳等からの重訳の形で行われた。アンドレーエフはロシアの地方文学としてではなく、当時の文学世界のリーダーとして、苟も文学の行く末を考へる者には立ち向かう、権利と義務があると看じられたのである。

より詳しく翻訳者・論評子の顔ぶれを検討すると(一)上

田敏とその門下である『芸苑』同人（多くは敏の帝大での教え子、敏の親戚。）（一）二葉亭四迷と二葉亭訳によってアンドレーエフ作品に接したという小宮豊隆・夏目漱石ら⁽¹⁾、（三）昇曙夢と早稲田大学系⁽²⁾、の三つの系列に従ってアンドレーエフが紹介されたことが推定される。

二

「犬（クサカ）」は、ロシア語アンドレーエフ全集で七頁足らずの短編である。ところがこの小品を上田敏（訳題「クサカ」）『新小説』明治四二年一月号）と森鷗外（訳題「犬」初出不明。『黄金杯』明治四三年刊所収）の二大家が前後して訳出している。⁽³⁾

明治時代、新文学の需要に供給が追いつかない状況の中、同一の、しかも問題作でもない作品が二度訳されるといふのは異例なことであろう。

鷗外は敏の訳を知っていた、と筆者は考える。

明治二九年頃、『帝國文学』誌上で上田敏と見做される帝大の学者が鷗外の訳語及表記について批判し、それに対し鷗外も『めさまし草』誌上で論陣を張り、論争は数字にわたった。明治三五年に上田敏が創刊した第一次『芸苑』は創刊号のみでおわり、敏は鷗外らと合流して共に『芸文』を創刊した。この雑誌は明治三九年に第二次『芸苑』が出されるまでつづい

ている。このような経過があり、当然言論人として上田敏の書くものに鷗外は常に注目していた筈である。

また、敏訳「クサカ」の載った雑誌『新小説』そのものを鷗外が読んでいたことはほぼ確実である⁽⁴⁾。しかも上田敏は原題通りの「クサカ」を踏襲している。鷗外の底本となった独訳本でも題は「クサカ」であったから、見すごすことは有り得ない。

敢えて同じ作品を訳したのはそれではどういう事情によるのだろうか。

三

ロシア文学を或る程度体系的に知っていた二葉亭四迷は「露西亞文壇の傾向」においてアンドレーエフについて次のように述べている。

露国現代の文学は自然主義の反動文学だ。露国の批評家は甘いことを謂つてゐる。自然主義は塵に塗れてゐる、其塵を段々と振り落して来た、アンドレーフに至つて塵が全く落ち切つたと謂つてゐる。……それから見ると日本の近來の傾向は塵に塗れやうと努めてゐるのだ、何うも一時代遅れてゐるやうな氣持がする。

つまり、二葉亭は、アンドレイエフを、自然主義の「次に来るもの」と見做していたのである。

二葉亭を通じてアンドレイエフを知った文学者は、二葉亭のアンドレイエフ観をかなりひきついだ。例えば、小宮豊隆（先述のように、二葉亭の「血笑記」によってアンドレイエフを知ったと回想している）は「レオニド・アンドレイエフ論」（『ホト、ギス』明治四二年三月号）を書き、その中で次のように述べている。

アンドレイエフの小説は全く気持ちを書いたものである。ある一つの事件に興味を持つて、其事件に纏綿して行く人間の性格を序を追ふて辿つて行くとか……或は写生文的に物の外部に顕はれた姿を顕はれたまゝに、低徊的に描き出さうと云ふのではない。……眼に浮かぬのは、正さしく其通りであると思ふ。所謂写生と云ふ方面から見たら、「血笑記」に限らず、他の小説だって全く駄目かも知れない。……自分はアンドレイエフを徹頭徹尾象徴主義者と云いたい。……普通の写生派の小説だとか云ふ意味に写实的と云ふ言葉を解釈すれば、「淵」などは下らない作になつて仕舞ふ。

「其の事件に纏綿して行く人間の性格を序を追ふて辿つて行くとか……顕はれたまゝに低徊的に描き出さうと云ふのでは

なく」というように、明らかに日本の自然主義文学を意識した表現でアンドレイエフを評価しようとしているところが注目される。

鷗外もアンドレイエフを二葉亭に教えられたと思われる。

明治四一年二人は会っている⁽⁵⁾が、この時二葉亭は数年がかりの難産であった「血笑記（赤い笑い）」の翻訳を版元に渡した直後であった。また、明治三九年十二月、翌四〇年十月、翌四一年四月と、この頃二葉亭は発言を求められるたびにアンドレイエフについて語り、「どうしても近頃のアンドレイエフの勢と云ふものは非常ですよ」（『記者日記』『早稲田文学』明治四〇年十月）と言っていた。二人の間で文学論が交わされたなら、アンドレイエフが鼓吹されなかつた筈はない。おそらく鷗外はアンドレイエフ訳出の動機を二葉亭に与えられたらう。

日露戦後、和風自然主義の高まりに対し、“牛の涎”（四迷「平凡」明治四〇年）、“性欲を人生の中心であるかのごとくしてゐる”（鷗外「キタ・セクスアリス」明治四二）、“真・善・美・壮のうち真のみを偏重するのは間違ひである”（漱石「イズムの功罪」明治四二）といった不満の口吻を漏らしていた文学者達がいた。

彼らにとってシンボリストとしてアンドレイエフを評価することが日本の自然主義への反措定としての意味あいをもつ

ていたのではないか。

四

上田敏の訳はまさにそのような文脈で問題になっていた。

アンドレーエフ作品の翻訳を収めた単行本『心』が刊行された直後、まず発言したのは『無名通信』子⁽⁶⁾である。

『無名通信』中の副題は「『心』は誤譯以上の出鱈目譯 語學の缺乏・理解力の未熟」というものであり、

全体氏のやうな上滑りの人がアンドレーエフ物などに手出しをしたのが誤りだ

などというおよそ理性的でない、罵言をぶつけている感があり、感情的な縫れさえ思わせる。しかし敏が『心』の序文でアンドレーエフの特色を「心情の描写、運筆の簡勁」「要するに心理の描写、特に病理的心理の描写が(アンドレーエフの：引用者注)得意の題目である」と述べたところをとらえて「象徴主義的作物と云ふことに気付いて居らぬらしい」と激しく反発していることは重要である。

これは、アンドレーエフが「心理の描写」をしたかどうか
が問われる論争に発展する筈であった。

ところが敏は一連の記事に正面から答えていない。^(?)「言語

学に所謂 *purism*」といった、修辭の問題に読み代え、訳の日本語文の工夫についてだけを書いている。『無名通信』批判と敏の答、両者のやりとりを読んで鴎外が一種の技癢を感じたろうことは想像できる。

五

鴎外は「クサカ」を訳した。

原文への忠実さという観点で訳文を検討してみるならば、おそらく敏訳の方に軍配は挙がるだろう。そもそも原文・独訳共に全体は五部に分かれたれ一―五のナンバーがうってあるのを、鴎外は無視して全編一まとめに訳している。センチンスの切れ目も任意に変えている。冒頭も底本の第一文を二文に、第二文を三文に分けている。しかし鴎外が

一字一字に訳して、それを配列したからと云つて、それで能事畢ると云ふわけではない。故らに足した語を原文にないと云つて難じたり、わざと除いた語を原文にあると云つて責めたりしても、こつちでは痛癢を感じない(「翻訳について」)

と語っている以上、その「故意」を付度する方向で考えることとする。

上田敏と森鷗外の訳文を比較すると、後者の訳が情緒纏綿という印象を受ける。冒頭の一文を挙げてみよう。

誰のでも無い、名も附いてゐない、寒さの強い永い冬を何處で過すのやら、何を食べて生きてゐるのだか。空腹じい事は同じでも、主人持を自慢にして威張つてゐる他の犬どもは此犬を暖かい薬屋に寄付けなかつた。(上田敏訳)

此犬は名を附けて人に呼ばれたことはない。永い冬の間、何處に何うして居るか、何を食べて居るか、誰も知らぬ。暖かさうな小屋に近づけば、其處に飼はれて居る犬が、これも同じやうに饑渴に困められては居ながら、其家の飼犬だといふので高慢らしく追ひ拂ふ。(森鷗外訳)

上田敏が原文通りややつき放した文体で訳しているに比べ、鷗外の訳は哀れ深い。犬の淋しさ、犬の目が強調されて作品が統一的な気分で満たされている。もう一つ例を挙げてみる。

後足の間に尻尾を挿んで直に遁出するか、それでなければ、通行の人に飛掛つて噛付さうにするから、棒切で逐拂はれる。(上田敏訳)

時々は又怒つて人間に飛付いて噛まうとしたが、そんな時は大抵杖で撲たれたり、石を投付けられたりして、逃げなければならぬのであつた。(森鷗外訳)

鷗外訳では、女の子の清らかな優しさが強調され、犬クサカは愛に飢え、淋しい、哀れな存在であることが書き込まれる。そのためには、しばしば原文(独訳底本)になかつた言葉、例えば

人は皆寝て居るのだ。犬は羨ましく思ひながら番をして居る。

の傍点部分等を付け加えている。

そうしておいて、本文では

このクサカという名がかういふ風に初めてこの犬に付けられた

と、クサカを固有名詞と解していた。鷗外が、クサカという独訳の題(原題と同じ)をとらず、「犬」と一般化した題にかえたところに、一個の犬の平面描写ではないんだぞ、という象徴主義的な意識の強調がみられる。

上田敏の訳に嫌らないものを感じて訳し直してみたものの、発表する訳にもいかず、のち単行本にだけ収めたのではないか。

アンドレーエフといえば、人間の獣性、無神論の強調ともとれる、「読むに耐えない」ようなものがその代表作とされる。「崖」「霧」などは発表直後トルストイ夫人が公開書簡で批判の声を挙げたことから大がかりな論争になったほか、風俗紊乱の嫌で（日本を含む）多くの国々で発禁処分をうけた。「クサカ」はアンドレーエフの作品中ではむしろ例外的といえる。鷗外が「クサカ」を選んだことについては、短編としての手軽さに加え、鷗外自身の好みが出ていと思われるし、また自然主義の反指定として、なるべく暴露的なものでない叙情的に訳せるものを選んだと解することができよう。

六 「クサカ」以後

アンドレーエフの受容（誰が、何を訳したか）には、当時の言論界の空気が反映され、それは短い間に大きく変わった。鷗外らの一世代下の戦後世代にとって、アンドレーエフの絶望こそが、自分達の閉塞感と同質なものであると感じられてうけ入れられた。鷗外らが排した「深淵」「霧」など、官能的な刺激の強い作品がことさらに訳されるようになり文学青年たちによって「トルストイ、ドストエフスキーなどとはち

がって、もっと近い感じのする名だった」（武者小路実篤）と
いって貪り読まれた。

小宮豊隆は前掲論文中で「アンドレーエフの作品には……社会劇だの社会小説だのと称せらるるものはない」「社会制度、人間生活に対して、ある種類の意見を述べたものを見出すことは出来ない」と強調していた。アンドレーエフには「七刑囚」という、テロリスト五人を含む七人が死刑の判決をうけたときの七様の心を描いた作品があるが、小宮は、これを読んだ上で「初めの小説に比べて精神がない……第一、七人の異なった気持を書き分けやうと企てるからが、他所々しい書き振りである」と述べた。アンドレーエフの文学は「事実」「社会性」「客観性」を描かず感覚だけを生々しく読者に
つたえるところがその身上だとされたのである。

しかしまもなくそれも転回した。「七刑囚」は明治四三年大逆事件がおこると、相馬御風によって直ちに（明治四四年）訳された。大逆事件の弁護士をつとめた平出修⁽¹⁰⁾は事件の裁判を作品化した「逆徒」（『太陽』一九卷二二号、大正二年）⁽¹¹⁾を書いたが、その執筆にあたって「七刑囚」を手本にしたことは相馬御風が平出に宛てた手紙⁽¹²⁾に次のようにあることで明らかである。アンドレーエフは急激に社会主義的メッセージとして読まれはじめたのであった。

先日の御手紙を拝見して以来、此の御作を拝見すると云ふことが近き未来に於ける楽しい期待の一つとなつて居たのですから、いよいよそれを拝見する事が出来て非常にうれしく思ひました。そして僕のまづい紹介をしたあの作が、これ程の貴いものを生み出す動機となつたのかと思ふと、涙がにぢみでるほど嬉しかったのです。

荒畑寒村は『近代思想』（大正二年七月号）に『七死刑囚物語』書評」を掲げ

僕は正直なる人間は、必ず此の物語に拠て、何故に此の『恐ろしく不公平なる』組織が存在せねばならぬかといふ事を考へさせられるだらうと思ふ

と訴えたのであった。

注

(1) 明治四二年「それから」執筆の頃、夏目漱石は小宮からアン・ドレーエフ（独訳）の講読をうけた。

(2) 島村抱月がロシヤ文学研究の必要を唱えて水明会という研究

会をつくり（明治三九）そこに先生として昇曙夢がよばれてゐた。

(3) 『黄金杯』所収の諸作品が「山彦」一編を除くと明治四〇年の暮れから明治四一年いっぱいの中に訳筆を執つたと云う事実からすると、既に訳出してから上田敏の訳が出た、ために雑誌に発表することはせず後の単行本化の際に加えるにとどめたと云う考え方が穩当かもしれない。そうするとほぼ同時に訳筆が運ばれてゐたことになる。しかし本稿では明治四三年に訳されたとする説に一応従つてその上で論じてゆきたい。

(3) 底本：

仏訳（上田敏）SPERSKY 訳『アンドレーフ小説集』1908・4。未見

独訳（森鷗外）DER GRUND UND NDERE NOVELLEN, DEUTSCH VON THEO KROZCEK HALLE A. S., VERLAG VON OTTO HENDEL O. J. 鷗外文庫にあり。

(4) 第五巻に載つた「途中」（小山内薫）は読んだことが確実であり（鷗外「長谷川辰之介」文中）、又同誌の寄贈を受けていたことも右文中の「新小説がきた」という言葉使いからわかる。

(5) 「長谷川辰之介」鷗外

(6) 昇曙夢と推定。

(7) 明治四二 『心』出版

明治四二、七月一日 『翻訳会の恥辱』『無名通信』

明治四二、七月二五、二七日、「一記者」記事「読売新聞」
明治四二、八月一、二日「小生の翻訳」『読売新聞』

明治四二、八月一五日「小生の翻訳を読んで上田敏に答ふ」

*敏は『無名通信』の文を読んでいない。同年七月二五、二七日に互る読売新聞の記事は読んでいる。

(8) 「まあ好い心持だ事」(敏訳：あゝ面白い。)、
「本当に憎らしい犬だよ」(敏訳：大きな厭な犬だわ。)
といったところに、鷗外がかなり娘の年齢を上設定(原作の描写は小学生らしい)していることがみてとれる。

また、左の、

夏が終わり、クサカを置いて別荘地を去ろうという時の、
今にも泣き出しさうになつて……小さい鼻の上には皺が出る。
母は、ードガイエフさんの家から、小さい犬を下さるといふが、大層良い種の犬で、それにもうよく芸が仕込んであるさうです……ね解りましたか。あんな犬なんかつまらない。
——惜しいのねとなほもレリヤは繰返したが、もう泣いては居なかつた。(上田敏訳)

という部分が鷗外訳にはない。これは独訳にないためと思われるが、全体の解釈・印象を大きく変えている。

(9) 原文は……こうしてクサカ(クサーチする者。嘔む奴)とよばれるようになった。

(10) 「明星」同人。明治法律学校を卒えて神保町に法律事務所を開いていた。明治四三年與謝野寛の依頼で大逆事件の弁護団に

加わつた。観潮楼歌会やパンの会にも加わり鷗外の知遇を得ていた。鷗外から教示された社会主義関係の文献を活用して優れた弁護を行つて、被告新村忠雄に感謝されたと云う。「鷗外は平出修に何を示教したか」(平出彬、『鷗外』第四二号、昭和六三、一月、森鷗外記念会)という論文もある。

(11) 事件関係の小説には他に「畜生道」「計画」(共に大正元年「スバル」初出)等。

(12) 春秋社『平出修集』一九六五年所収。未見。(藤井省三『ロシアの影』平凡社選書 から引用)

付記：「明治期露西亞文学翻訳攷(一)二葉亭初期のツルゲーネフ翻訳」はつくば国際文学の研究紀要に発表した。